最高気温が連日 35 度を超えるわりに激しい雨が混じる真夏ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。熊本労災病院のＨＰを訪れていただき感謝申し上げます。

8 月 5 日に開催された八代くま川祭りには、当院からも 160 名参加しての総踊りが、台風通過前の間隙をぬって挙行されました。総勢 5,000 名を越える老若男女の皆様が、「八代音頭」や「八代よかとこ YOTTOIDE」のリズムに乗って、市内の会場で元気のよい踊りで盛り上がりました。夏祭り、盆踊りは、もちろんお盆の供養から始まっていますが、ご先祖だけでなく、親族、そして地域や職場のみなさんの熱いコミュケーションの場となる、日本的なわくわくする行事だと思っています。はや、来年が楽しみです（踊りの様子など、当院の facebook もご覧下さい。）。

秀岳館も甲子園でがんばりました。県内出身者がベンチ入り内に 1 名だけと言われましたが、彼らには、やはり「学校のため、その郷土＝熊本、八代のため」という意識がしみこんでいると思って熱戦をみていました（県外の方はご存じないかと思いますが、熊本労災病院は立地上、港や工場に近い、熊本県第二の都市“八代市”にあります。秀岳館は創設の頃、「八代商業学校」と言われた八代の学校です。）。

ところで、「〇〇のため」という言葉は、医療者にも身近なフレーズです。「〇〇のため、全力を尽くそう」、これが医療者になろう、続けて行こう、の最大の原動力です。労災病院でも 80 名の医師、400 名の看護師、そして現代の医療に必要な様々な職種の専門職、事務職が患者様のため、理念「良質で信頼される医療を目指します」という意識を持って日夜奮闘しています。ただ、最近の「働き方改革」の流れもあり、医療者といえども労働者であり、過重な勤務は心身の疲弊を招いてむしろマイナスであるという論理が広まりつつあります。私より大先輩の医師の方々はその風潮を憂うる傾向もあり、医師になって 40 年の私も多少の違和感を感じます。「主治医」は、いつでも患者さんの求めに応じて駆けつけ、重症ならずっと寄り添う、という風に教育を受けてきたからです。現在、この「主治医」をチーム制にして、一人に負荷がかかることを避けようという病院も増えてきました。過労で倒れてしまったら本末転倒です。当直のあとはできるだけ帰って休む、子育て女性医師の勤務環境を整える等の基本的な対応は、労災病院たる当院でも可能な限り行うようになっています。そのためには、当然ですが、医療者の人数が増えなければなりません。幸い、熊本大学

はもちろん、産業医大などの医局、教授の御配慮で優秀な医師が集ってくれていますが、今一層の充実を目指したいと思っております。医療界はなお職人的世界で、先輩の振る舞いをみて育つ風潮が残ります。がむしゃらに患者様のために働くばかりでなく、時には家族との時間も大事にする、趣味にも長じて引き出しの多い人間性を形成する、のような姿を後輩に見せるのも最終的には良医に通じる道かもしれないと最近思います。しかし、いざとなったら全力でなんとかするのも医療者で、その基本的態度は不変、普遍と思っています。労災病院の医療を直接間接に経験することがあって、もし思うところがございましたらなんなりと御指摘ください。

　気づくと、夏休みはもう終盤です。なんとなく寂しくもあり、高校生の若々しい通学の喧噪が懐かしくもあります。残暑は厳しいですが、安らかな秋を楽しみに待ちましょう。